

落としもの

1. 糞の中身

私たちが動物の存在を知ることができる痕跡の一つに排泄物があります。打吹山で出会うことの多いものは、新緑の季節の毛虫の糞、年中出会えるものに哺乳類と鳥の糞があります。

哺乳類では2000年代前半まではタヌキが多かったのですが、伝染病の疥癬が流行して個体数が激減したため見られなくなりました。長谷寺近くのアナグマ、場所を問わないテンや人家に近いイタチというように糞の分布から生活圏がわかります。そのためには糞の識別が大切で、大きさや形態だけでなく、内容物が目印になります。種子や昆虫の体、動物の骨は消化されないため残っているからです。岩石の上に糞をするイタチとテンは似ているのですが、イタチは主に肉食でありテンは雑食であるため、種子がたくさん含まれていれば



テンの糞
イヌビワの種子



ヒヨドリの糞
オオバヤドリギの種子

ンということになります。タヌキは人が捨てた残飯をも漁るためプラスチック製の魚型の醤油入れをよく見ました。人との関わりも見えてくるのです。

鳥の糞は表面が白くて細長い紐状のものが多いのですが、やはり消化できない昆虫の一部や種子が含まれています。種によって昆虫であったり、水分の多い果実、硬い種子を割って食べるなどさまざまですし、季節によっても変わりますので年間通して観察する面白い対象になります。イカルのような硬い種子を割って食べる鳥の糞には痕跡が残らないのですが、種子を食べられた樹の下には殻がたくさん落ちますのでこれも食事の証拠品となります。

2. 種子から樹種を知る

植物は種子を作ることによって種を存続させています。しかし、これを散布する必要がありますが動くことができません。このためにいろいろな手段を講じています。もっとも古くからある手段と考えられるのは、風によるものです。水流もあります。マメ科のように弾ける莢の弾力で遠くまで飛ばすものもあります。また、哺乳類や鳥類に食べられて遠くに糞とともに散布してもらったり食べ残してもらったもの、昆虫特にアリに運んでもらうなど様々な方法を取り入れています。動物に付着して運んでもらうのは背の低い草本です。

風によって運搬されるためには軽いこと、翼や冠毛を持ち風を受けやすいことが形態的な特徴になります。モミジの翼、シデの仲間の葉のような果



テイカカズラ

苞、テイカカズラの冠毛です。食べられることを前提にしたものは、水分の多い果実の中に消化できない種子を持ったり、食欲を失わせるタンニンを含むカシのどんぐりなどです。



オオバヤシャブシ



イヌシデ

高木では種子を直接見ることができません。落果や鳥の糞の中から種子を知ることになりますので、日頃の知識の蓄積が必要になります。確実にこの木の種子だとわかるものを記録し、残して置くのです。ミツバアケビとムベはともに打吹山に生育し、果実は似ているのですが、種子は非常に異なっています。果実が落ちて潰れていても同定は可能なのです。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2020)